

追悼 大橋博司先生



故 大橋博司先生 遺影

御 略 歴

大正12年 9月26日	静岡県磐田郡福田町に生まれる		理学会) 創設世話人
昭和21年 9月	京都帝国大学医学部医学科卒業, 実地修練	54年~55年	第3~4回日本失語症研究会会長
22年 4月	京都帝国大学医学部精神医学教室副手	55年 9月	第4回神経心理学懇話会会長
23年 4月	京都大学医学部附属病院精神神経科医員	55年 9月	Internationale Paracelsus-Gesellschaft (Salzburg) 会員
23年 9月	大阪市立医科大学精神科教室助手	56年 1月	「失語症研究」(学会誌: 創刊) 編集委員
28年 2月	医学博士 (京都大学)	56年 7月	日本神経心理学会理事長
28年 5月	京都大学医学部附属病院精神神経科助手	56年 9月	第12回世界神経学会 (京都) シンポジウム「大脳半球側性化」座長
23年10月	京都大学医学部精神医学教室講師	57年 4月	世界精神医学会京都シンポジウム事務局長
37年 5月	第59回 日本精神神経学会シンポジウム「新しい局在学」報告	58年 1月	“Psychopathology” (Karger, Basel) 編集委員 (Co-editor)
41年 1月	“Neuropsychologia” (Pergamon Press, Oxford/N. Y.) 編集委員 (Associate Editor: 昭和48年より Advisory Board)	58年 7月	第7回世界精神医学会 (Wien) シンポジウム「精神医学の危機」座長, 第3回日独精神病理学会世話人
41年11月	京都大学保健管理センター助教授	58年11月	第17回日本てんかん学会会長
42年 4月	京都大学医学部精神医学教室助教授	60年 4月	国立京都病院院長
44年 7月	名古屋市立大学神経精神科教室教授	60年 5月	「神経心理学」(学会誌: 創刊) 編集委員長
48年12月	京都大学医学部精神医学教室教授	60年 7月	京都大学名誉教授
52年11月	日本失語症研究会 (59年より日本失語症学会) 理事	61年 9月11日	御死去
53年 5月	神経心理学懇話会 (56年より日本神経心		

追悼 大橋博司先生

濱 中 淑 彦*

第10回日本神経心理学会総会開催の前日、昭和61年9月11日早晩午前5時15分、当時本学会理事長および編集委員長を務めておられた大橋博司先生は、急性呼吸不全のため、関係者の必死の治療にもかかわらず、京大病院において急逝された。享年62歳であった。先生のあまりにも突然の御逝去により、わが国の神経心理学界は、その基盤を築くにあたって決定的な役割を果たされた先達、卓越した指導者を失わねばならなかった。

先生は大正12年、静岡県でお生まれになり、掛川中学、旧制第3高等学校を経て、昭和21年京都帝国大学医学部を御卒業、昭和22年同大学精神医学教室（当時の主任：三浦百重教授）に入局された。昭和23年には大阪市立医科大学精神科教室に赴任され、阪本三郎教授（当時）のもとで精神神経学一般の臨床に従事する一方で、臨床脳病理学（現在の臨床神経心理学）の研究をお始めになり、昭和26～27年にはすでに間接視読字（太田幸雄と共著）、失語に関する論文を発表されているが、今日なおしばしば引用される「失文法——日本語における特質」、「失語における一般障害」（博士論文）、「視床症状群」（黒丸正四郎と共著）に関する諸論稿も大阪市大時代のお仕事である。先生が神経心理学を志されるようになった経緯については、後に主著「失語・失行・失認」などにおいて繰り返し述べておられるように、昭和20年より語学の勉強を兼ねて参加されるようになった坂田徳男大阪市立大教授（当時）の哲学研究会において、ベルクソンの「物質と記憶」を講読して、脳と精神活動に関する透徹した思索に深い感銘を受け

られたことが、大きな契機となったようである。しかしまた、Wienにおいて脳梁切断動物実験の先駆的研究（明治36年）を試み晩年には再び視覚失認に強い関心を示された今村新吉先生（京大精神医学教室初代教授）と、その伝統を引き継がれて「失語における音声学の崩壊」（昭和24年）などの問題への貴重な失語学的貢献を残された阪本教授をめぐる当時の学問的雰囲気も、先生の志向を大いに刺激したであろうことは想像にかたくない。この時代を回顧して後に、「あの頃は新しい本も雑誌も乏しかったので、古典論時代以来の基本的な文献を勉強する時間がたっぷりあった」ともらしておられたことがあるが、それも先生の抜きん出た語学力を前提してのことであつたろう。また言語を発達面からも理解するために、当時出生した御長女が言葉を習得して行く過程を克明に観察・記録されたとお話を伺ったこともある——この記録は今もお宅に残されているはずと想像する——が、当時の先生が失語研究に専念、没頭しておられた様が、ほうふつと目に浮かぶようである。

昭和28年、京大精神医学教室（当時の主任：村上 仁教授）に戻られた先生は、失語研究にさらに邁進されてゲシュタルト変遷理論（Conrad）などの検討を試みられるとともに、失行、失認をも含めて多数の症例を、大脳半球優位の視点から精緻に観察、記載されたが、なかでも従来一般にはほとんど解明されていなかった右劣位半球症状学への貢献は国際的にみても特筆に値すると思われ、本邦で最初と考えられる症例記載は優に十指を超えるであろう。これら一連の御研究は、わが国における神経心理学の最初の包括的著作「失語・失行・失認」

* 京都大学医学部精神医学教室

(昭和35年)および第59回日本精神神経学会シンポジウム「新しい局在学」(昭和37年)での報告「失語・失行・失認——大脳半球優位の問題を中心に」となって結実した。さらにこの頃より先生は、失語・失行・失認症状の他に、本来臨床脳病理学の領域で論じられてきた、そして今日も臨床神経心理学で扱われているさまざまな精神症状(幻覚、知性・記憶障害、発動性障害、感情・性格変化)を脳症症状の視点から考察する研究にも着手され、その成果を「臨床脳病理学」(昭和40年:昭和35年の著書の改訂増補版)の大著としておまとめになった。これらの神経心理学的研究のあるものは、教室の若い精神神経科医との共同研究であるが、たとえば失行・失認患者の視野検査を眼科医にまかされることなく自ら行なって範を示されるなどの初歩からの懇切な手ほどき、研究テーマの過去と現況を包括する該博な知識、あくまで事実と忠実であろうとする厳しい姿勢から、われわれは限りなく貴重なものを学ぶことができたのであった。この頃から神経心理学を志す若き学徒が全国各地より、次々に先生の臨床の実地を見学するために京都を訪れるのが見られるようになったが、先生は率直、気軽にこれらの希望に応じられるのが常であった。

「臨床脳病理学」の英文表題は“Clinical Neuropsychology”(1965)であるが、これが神経心理学 neuropsychology なる用語のわが国に定着する大きな契機となったのはいうまでもない。翌41年(1966)には先生は、Cl. Faust 教授(Freiburg 大学)などの依頼により、1963年に発刊された国際的かつ学際的専門誌“Neuropsychologia”の Associate editor を務められるようになった。また昭和45年以後数年にわたる蕪山失語症シンポジウムには欠かさず出席されて失語検査作製にも積極的に参加され、昭和50年代に入ってわが国でも漸く神経心理学興隆の兆しが見えはじめる頃、日本失語症研究会(昭和52年:後に学会)の設立に参加して理事、会長、編集委員を引き受けられたのみならず、自ら率先して神経心理学懇話会(昭和53年:後に本学会)を創設され、このたびの御逝去に至

るまで数々の苦勞をいとわれることなく、第4回会長をはじめ、理事長と編集委員長の重責をも果たしてこられた。また京都で開催された世界神経学会における「大脳半球側性化」シンポジウムにおける Lhermitte 教授と共同での座長振りは今日なおわれわれの記憶に鮮やかである。Schuell, Critchley, Benton, Poeck, Gazzaniga, Pöppel, Benson らの来日に際しても和やかに意見を交換され、特に敬意を払っておられた Hécaen を Paris にお訪ねになった折のことを楽しくお話し下さった。——この間も先生は引き続き、数々の著作、講演、研究会での発言などを通じて、神経心理学研究の発展と若手研究者の養成に尽力を惜しまれなかった。ここでは「失語症」(42, 52年, 現在第3版改訂中), 「脳病理学」(異常心理学講座, 47年), 「行為と認知」(失語症の基礎と臨床, 55年), 「精神と身体」(精神の科学, 58年), 「ブローカ中枢の謎」(60年)など、神経心理学関係の著書のいくつかを挙げるにとどめよう。精神医学, 医学史(特に Paracelsus)などの著作, ギリシャ語原典などを含めた数々の翻訳のお仕事(Hippocrates, Ey など)その他にはここでは立入らない。

今秋の姫路における本学会を大層楽しみにしておられた先生は、午後に予定されていた役員会の準備を整えられ、翌日には M. L. Albert 教授の招待講演の司会を務められるべく、また御自分で一般演題《18世紀末における「失語症状」記載の一側面について》の発表をなされるべく、会場に出発される同じ日のことであった。これからもまだまだ長きにわたって御活躍、御指導頂けるものとばかり信じていた私たちにとって、先生の訃報は大変悲しい試練となったが、最後の日に至るまで先生が神経心理学に対して脈々たる熱意を抱いておられたことは、私たちの心にいつまでも忘れられることなく刻まれるであろう。今はただ数え切れぬ長年の学恩を思いつつ、帰天なされた先生の御冥福を心からお祈りするばかりである。

(昭和61年10月記)